

第一節 だいいちぶ 第五話 だいごわ 朱ぬりのおかご

むかしむかし、きやがたあんらくじさまところ  
昔々、北潟の安楽寺様の所にね、「お駕籠」といって、殿様などが乗られる駕籠があつ  
たんやと。その駕籠は、赤い色をしとつて、四人かつぎで、当時でいうと立派な駕籠やつたんやと。ほや  
し、その駕籠は、今でも北潟の安楽寺様にあるんやよ。

それじゃ、そのころのお話をしよ。

むかしむかし、きやうと  
昔々、京都には、朝廷があつたんや。ある時、

そこに小さな皇子様が生まれなかつたんやと。普通の赤ん坊は、

半月くらいたつと、お座りして、一年ぐらいすると、もう立つて

歩くやろ。それに、おむつさえあてていけば、一人で何でも出来るね。

ほやけど、この皇子様は、まるで骨なしの「くらげ」のような体だつた



から、天皇様や皇后様は心配されてね。いろんなお医者様に治せないかと頼まれたんやと。ほやけど、どうしても立てない、座れないままだったんだって。ほやけど、あきらめきれない天皇様、皇后様は、こうお考えになさったんや。「日本中のりっぱなお坊さんの中には、お祈りでうまく治す者がいるかもしれない。」ってね。

そこで天皇様は、日本中のお坊さん達におふれを出したんや。「もし、皇子様が普通の人のような体になったら、どんなご褒美でもやろう。」ってね。

その時分、北潟の安楽寺にはね、志国法院というお坊さんがおられたそうや。それで、そのお坊さんにも、そういうおふれが来てねえ。そのお坊さんも、

京都へ登ったんや。京都には、たくさんのお坊さんが集まっていた。

そこで、天皇様は、皇子様について話をしたんや。

ほやけど、皇子を治せる力のある者は、誰もいなかったんや。



でも、たった一人だけ、引き受けられたお坊さんがいたんや。それが、北瀉の志国法印というお坊さんだったんや。ほんで、天皇様や皇后様は、志国法院というお坊さんに頼んだんやと。ほやけど、京都に登った大勢のお坊さんの中には、「北瀉のお坊さん、頑張って下さいね。」と言ってかえ帰る人もあれば、「くそう。あんな小さな村の小さなお寺の坊主が……。」と言って帰る人もいたんやと。ほやけど、志国法印は、そんなもん、気にせんで、天皇様や皇后様にこうお願いしたそらや。「この京都という所は、あまりいい場所ではございません。水がきれいで、山もきれいな北瀉へ、皇子様をおつれしとうございます。北瀉は住んでいる人達の心もいいですら、そこで皇子様のお体を治しとうございます。よろしいでございませうか。」と、いうようにね。

もちろん、天皇様や皇后様はおゆるしされたんや。ほやけど、皇子様は、「くらげ」のようであるんし、立たれんさけ、天皇様や皇后様はお考えになつて、お駕籠を作ることになったんや。そのお駕籠は、赤くて四人でかつぐ駕籠でねえ。その駕籠に皇子様を乗せて、京都から北瀉へおつれしたんやと……。

それから、志国<sup>しこくほういん</sup>法院は、毎日毎日お祈り<sup>いの</sup>したんや。皇子様<sup>おうじさま</sup>のお体<sup>からだ</sup>が治る<sup>なお</sup>ためには、自分<sup>じぶん</sup>の体<sup>からだ</sup>のことなどかまわずにね。

すると、翌年<sup>よくとし</sup>、その熱心<sup>ねっしん</sup>な気持ち<sup>きも</sup>がみのったのか、皇子様<sup>おうじさま</sup>は、不思議<sup>ふしぎ</sup>に座<sup>すわ</sup>ることが出来<sup>でき</sup>るようになったんや。そして、三年<sup>さんねん</sup>ほどすると、皇子様<sup>おうじさま</sup>は、立<sup>た</sup>って歩<sup>ある</sup>くことが出来るようになったんや。

そして、また、志国<sup>しこくほういん</sup>法院は皇子様<sup>おうじさま</sup>といっしょに京都<sup>きょうと</sup>へ登<sup>のぼ</sup>ったんや。京都<sup>きょうと</sup>におられる皇子<sup>おうじ</sup>元氣<sup>げんき</sup>な姿<sup>すがた</sup>を見た天<sup>てん</sup>皇<sup>のうさま</sup>様<sup>さま</sup>や皇后<sup>こうごうさま</sup>様<sup>さま</sup>はねえ、どんなに喜<sup>よろこ</sup>ばれたことか。……。天<sup>てん</sup>皇<sup>のうさま</sup>様<sup>さま</sup>や皇后<sup>こうごう</sup>様<sup>さま</sup>は、うれしさいっぱいのお顔<sup>かお</sup>で、「志国<sup>しこくほういん</sup>法院<sup>なん</sup>に何<sup>なん</sup>でも褒<sup>ほう</sup>美<sup>び</sup>をあげよう。」と、おっしゃったんや。

ほやけど、加持<sup>かじきとう</sup>祈<sup>いの</sup>禱<sup>の</sup>という、お祈り<sup>いの</sup>はものすごくたいへんやったさけ、志国<sup>しこくほういん</sup>法院<sup>なん</sup>はすっかりやせてしまつてねえ。もう、見る<sup>み</sup>かげもなく、今<sup>いま</sup>にも死<sup>し</sup>にそうになつてしまつて、か細<sup>ほそ</sup>い声<sup>こえ</sup>で、こう言<sup>い</sup>ったんや。「私<sup>わたし</sup>は、もう、皇子<sup>おうじさま</sup>様<sup>さま</sup>のお体<sup>からだ</sup>が治<sup>なお</sup>られたこと<sup>まんぞく</sup>で満足<sup>まんぞく</sup>です。もう、何<sup>なに</sup>も望<sup>のぞ</sup>むことはありませんが、体<sup>からだ</sup>も弱<sup>よわ</sup>つておりますし、年<sup>とし</sup>もとつているため、できるならば皇子<sup>おうじさま</sup>様<sup>さま</sup>が乗<sup>の</sup>られたこの朱<sup>しゆ</sup>ぬりのお駕<sup>かご</sup>籠<sup>くた</sup>を下<sup>くだ</sup>さいませつてね。」

志国法院は、その駕籠に乗って北潟へ帰ったんやと。そこでおしまいならいいんやけどね、まだあるんや。それはね、志国法院は、無事、北潟へ帰ったんやないんや。

北潟へ帰る途中、三井寺というお寺に泊まったんや。

ところが、そのお寺には、京都の皇子様のお体を志国法院が

治したということで、腹をたてているお坊さんがいてねえ。そのお坊さんは、

その日、志国法院に、ごちそうをうんとして、ねむり薬を入れたお酒を

たくさん飲ませたんや。もちろん、志国法院は、体が弱っている上に、

おなかいっぱいごちそうを食べて、ねむり薬を飲んださけ、そのまま、次の日も、

また、次の日も目がさめず、この世の人でなくなってしまったそうや。

ほやけど、朱ぬりのお駕籠だけは、北潟の安楽寺様へ戻ってきたんや。

今でも、北潟の安楽寺様に残ってるんや。みんなも一度、見てくるといいね。

